

偽装社会と青年の自己愛

人間学部 人間関係学科 臨床心理専攻 助教授 高 森 淳 一

1. 偽装社会

姉歯一級建築士による耐震偽装が発覚したのが平成17年、はや2年になる。が、今年に入ても京都のホテルの耐震偽装が発覚したりと、姉歯氏の耐震偽装は例外的な事例というのでもなさそうだ。むしろ、社会風潮の典型なのではないかとさえ思える。

偽装にまつわっては、このほかにも、すぐに思いつくところで、雪印食品の牛肉偽装、カネボウの巨額粉飾決算、さらにはいっそう衆目を集めたライブドアの粉飾事件（有価証券報告書の虚偽記載、偽計取引、風説の流布）などが思い出される。

いずれも、およそ実態とはちがう外観を他者に裝ってみせ、安直に利益を得る瞞着的所業だが、こうした事件がたてつづけに起こり、社会を揺るがすのは、そもそも今の社会の根幹、とまでは言わないが、かなりの部分が偽装によって成り立っているからではないか、と思えてくる。

およそ他人からみて良さげに見えることに心を碎き、他者という鏡に映る自己の虚像を粉飾しようとする。かたや他人を判断するにも、肩書きだけでそのひとを信用したり、あるいは形となって見える成果だけで評価したりする。ぱっと見が大事。『人は見た目が9割』なんて表題の本がベストセラーになる所以である。もしかしたら、本の売れ行きも、書名が9割なのかもしれない。

そういえば、姉歯氏の髪はカツラだったそうで、これも偽装。これに偽証も加わるから、偽装、粉飾、虚飾という点では首尾一貫しているな、と感心しなくもない。

ここで話はやけに身近になるが、公衆の男子トイレでも、社会の一端というか、今昔の違いを感じる事柄がある。それは、最近の若者がトイレの洗面台でながながと鏡面をのぞき込むことである。自分が若者であった（およそ20年前）頃は、そんなことはなかった。それが、最近はさかんに鏡に自分を映して、こちらからすれば蓬髪としか見えない髪型に、カッコをつけようとさらに逆立てたりするのに夢中なのである。場合によっては用を足すのではなく、姿見のためだけにトイレに寄ったりもするようだ。物心ついた時から、男子トイレを使ってきたが、比較的最近まで、およそ男児たるもの、年齢にかかわりなく、トイレの鏡などには用がなかった気がする。

これを敷衍するのは、ちょっと牽強付会かもしれないが、現代青年の心性の一端がここに表徴されているような気がする。ということで、以下、青年期心性について話柄を転じよう。

2. 鏡像：誇大的な自己像と卑小な自己像

むろん青年期は、自分の容貌に关心の高まる時期で、若者は異性からの視線を横目で気にしつつ、カッコをつけ、良く見せよう、実際より良く思われようと背伸びをする。このことに今も昔も変わ

りはない。

がしかし、その心性において根本的に違っているのは、実像と虚像の比重が反転していることであろう。

かつての青年では、他者からよく思われようとして、理想の私（理想自我）と現実の私（現実自我）とのギャップを埋めるべく、現実の自分を向上させようと強迫的に努力するということが、しばしば見られた。

しかし、近年ではそうした強迫的努力は影をひそめている。一見したところ強迫的に完全・完璧を追求しているようであっても、完璧であることより、完璧と見えることに腐心しているのが実際だ。

見栄えのする理想自我は、ちょっとその気になりさえすれば、あるいは努力せずとも何かの拍子で、実現しそうなものと考えられている。より根本的には、実際にはそうでなくとも他人からそう思われさえすれば、それは実現したことになるという感覚が漂っている（社会科学で社会構成主義が人気を博すのも、こうした感性と無縁ではなかろう）。

つまり、等身大の自分に確からしさを抱けずに、他人の観念のなかにある仮想の自己像に傾注し、たえずこの仮想の存在を美化し、保存するためにあくせくする。そのため、ほんとうの存在のほうはおろそかになる。それでますます自己の実在感は希薄となる。それは、ある見方からすれば、他者のなかにあると推定される自己の鏡像に、実体のほうが拘束される状態である。

ふだんは、他人に映る粉飾された虚像としての誇大的自己が自尊心を支えており、その対極にある卑小な自己像は、否認されている。したがって理想自我と現実自我とのあいだにある懸隔は意識されにくい。

学生相談などに鬱と称してやってくる学生の多くは、メランコリー親和型性格とは違っており、他人からのちょっとした反応をきっかけに、尊大な自己と卑小な自己のあいだで振り子のように揺れては、一喜一憂している。それが「気分変調」ということになるわけだ。相談に訪れるのは、きまって自分の思ったように物事がうまくゆかなくなつたために、誇的な自己像が保持しえず、卑小な自己像が前景化し鬱氣分に陥ったときである。

実像よりも虚像に比重があると述べたが、じつのところ悪いと体験される卑小な自分というのは、実際よりもはるかに低劣なものとみなされている。つまり、他者の想念中に映じていると観念された、劣悪、無能、無価値で軽蔑に値する自己の姿である。したがって、好ましい誇的な自己も劣悪で卑小な自分も、ともに虚像であり偽の自己である。尊大な自己と卑小な自己とは写真のネガとポジのように反転した関係にあって、それらは主観的な価値においてもポジティヴとネガティヴという対照をなしている。そして対極をなすこれら2つの虚像のあいだを右往左往するのである。ヒーローか、さもなくば卑陋か。

3. 平凡恐怖・普通恐怖

こうした心性にあっては、自己の存在が他者に訴えかけることが重視される。そのため、人とは

違う（相違点は必ずしも社会的に望ましいものでなくとも良い）、目立つ、人気者になる、有名になる、特別の存在になることが大事である。

「まじめ」という評が、青年に歓迎されないのに気づいたのは不明にも比較的最近のことである。そうした価値観からすれば、日本の執着気質とでもいべき謹厳実直、精勤恪勤、刻苦勉励などはむしろ三下である。努力はしないが人目につく結果だけは良い、これがカッコいい。必死になるのは見苦しい（そして必死こいたうえにコケタともなればサイテー）。何事もクールが良い。自分を賭けるなんて野暮ったい。

こうした価値観には、平凡恐怖、普通恐怖がつきものである。現代女子青年に典型的な精神疾患である摂食障害について、下坂幸三（1999）は、こう述べている。「多数の摂食障害者たちも、ひとりの例外もなく、当たり前とか平凡にみられることをおそれ、嫌っている」。

こうした心性はひとり摂食障害の人のみならず、程度の差こそあれ、現代青年一般に見られる。フツーのサラリーマンにはなりたくない、一般事務は嫌。つまるところ何かの社会的役割を担うのは、自分独自の個性を矯めてしまう。そんな感覚。

ひところ、「ヤンママ（ヤング・ママ）します」というようなもの言いが流行ったが、「している」とは一時的な仮初の状態についての謂で、自己の本質を根拠づけることではない。そこからは、母親なる大半の女性が荷うような役割に自己を限定したくないという心性が窺われる。

つねに今の自分は本物ではない、今の自分とは別の自分、ひとつがたと驚くようなすばらしい自分がどこかに温存されているのだ。どおりで本当の自分探しなんぞに人気がでるわけである。こうした風潮の蔓延には、自己実現や個性化のストーリーをかまびすしく言いたてた通俗心理学にも責任の一端があろう。

今現在の自分を否定して未然の誇大的自己を心のよすがとするのは、アヒルの子が『みにくいアヒルの子』の話を聞いて、自分も実は白鳥だろうと思い込むようなものである。べつに白鳥でなくたって、アヒルとしてそのままふつうに成長すれば良いのだが。

他者に映る誇大的自己像に誘引されることの根底には、自分は必要とされないのではないか、無価値なのではないかという不安、生きることの手ごたえが実感できないといった自己不確実感が蟠踞している。ひとによつては、自己誇大感は背景に退いて、自己卑小感がもっぱら前景にでていることもある（あるいは、そもそも健康な自己肯定感がほとんど育まれていないひともいて、その場合、問題はいっそう深刻である）。

4. 自己愛の問題

以上、論じてきたような心性は自己愛、ナルシシズムの問題にまつわるものだ。ナルシシズムの語源となったギリシャ神話のナルキッソスは、水鏡に映った自己の姿に見入ったが、現代のナルキッソスは他者という鏡に映る自己の虚像を粉飾し、自己不確実感を下支えしようとする。むろんそれは、たんに個々人の問題だけに帰せられるものではなく、そうした自己不確実感を生み出す社会のありようも関係する。社会学的な考察はひかえるが、冒頭で述べたような偽装社会のありようは、

自己愛の問題の文化的次元における反映であろう。

現代社会に生きる青年の葛藤は、もはや社会的アイデンティティの獲得をめぐるものではなく、特殊な存在と普通の存在、万能感と無能感の極での動搖であるようだ。万能感の極にふれ込めば躊躇をさそう傲岸不遜な振舞いに、かたや無能感の極にふれれば無気力やひきこもりになるのである。

現代の青年期において達成すべき心理的課題は、何でもできるわけではないけれど、何にもできないわけじゃない。世間の脚光を浴びるような才能に恵まれたわけでもないが、まんざら捨てたものでもない、というような感覚を得ることにある。すなわち、いかにして万能感と無能感を中和させるか、「unique な私」と「one of them としての私」のあいだで均衡をはかるか、ということである。

もっとも、自己愛の心理的問題は青年に限らず、これからますます喫緊事になってくると予想される。ここでも若干、若い親世代についてふれた。じつに気鬱なことである。